慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	東独における宗教改革と農民戦争の研究の現状
Sub Title	The present standard of the study about reformation and peasant war in East Germany
Author	寺尾, 誠
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.4 (1962. 4) ,p.411(91)- 422(102)
JaLC DOI	10.14991/001.19620401-0091
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620401-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

外でしかなかった。むしろ土地を離れている場合が普通である。よいよ促進された。これまでと違い、領主で在地する者は非常な例彼の妻がそれを引受けた。十七世紀の末近くなって、この傾向はい

では、 であった。そうしたなかで彼は自己の地位の維持をはからなければならなかった。領主は土地を貸借関係のなかに組込むことによ力に保持し続け、さらにこの権利を行使することで土地を取得し、力に保持し続け、さらにこの権利を行使することで土地を取得し、力に保持し続け、さらにこの権利を行使することで土地を取得し、力に保持し続け、さらにこの権利を付けすることで土地を取得し、力に保持し続け、さらにこの権利を付けすることで土地を取得し、力に保持し続け、さらにこの権利を付けすることで土地を取得し、力に保持し続け、さらにこの権利を付けすることで土地を取得した。メテリはこの過程の所産にほかならなかった。

の変容とはこの過程の進行にほかならない。従ってそれは所領経営の賃貸者をも兼ねることによって自己の再生を考えていた。領主制の進行のなかで、領主層の交替は明白である。新領主は同時に土地十六世紀の封建危機が直接の原因となり、またその後の貨幣経済

のため領主がよぎなくされた姿勢でしかなかった。領主はこの二重のため領主がよぎなくされた姿勢でしかなかった。領主はこの二重のため領主がよぎなくされた姿勢でしかなかった。領主はこの二重をともとフェルミエ・ジェネラルは領主の代理でしかなかった。したった。ここにフェルミエ・ジェネラルは領主の代理でしかなかった。した。彼は一途にメテリを狙い、これによって土地の賃貸者の地位にた。彼は一途にメテリを狙い、これによって土地の賃貸者の地位にた。彼は一途にメテリを狙い、これによって土地の賃貸者の地位にた。彼は一途にメテリを狙い、これによって土地の賃貸者の地位にた。彼は一途にメテリを狙い、これによって土地の賃貸者の地位にた。彼は一途にメテリを狙い、これによって土地の賃貸者の地位にた。彼は一途にメテリを狙い、これによって土地の賃貸者の地位にた。彼は一途にメテリを狙い、これによって土地の賃貸者の地位にた。彼は一途にメテリを狙い、これによって土地の賃貸者の地位にた。彼は一途にメテリを狙い、これによって土地の賃貸者の地位にた。彼は一途にメテリを狙い、これによって土地の賃貸者の地位にた。彼は一途にメテリを狙い、これによって土地の賃貸者の地位にない。

農民戦争の研究の現状東独における宗教改革と

+

尾

このテーマの問題提起者の発題を簡単に紹介しよう。 とのテーマの問題提起者の発題を簡単に紹介しよう。 とのテーマの問題提起者の発題を簡単に紹介しよう。 とのテーマの問題提起者の発題を簡単に紹介しよう。 このテーマの問題提起者の発題を簡単に紹介しよう。 このテーマの問題提起者の発題を簡単に紹介しよう。 このテーマの問題提起者の発題を簡単に紹介しよう。 このテーマの問題提起者の発題を簡単に紹介しよう。 このテーマの問題提起者の発題を簡単に紹介しよう。

A スタインメッツの問題提起

東独における宗教改革と農民戦争の研究の現状一、ドイツにおける上昇しつつあるブルジョアジーの最初の偉大

二、初期市民革命の時期区分。

- 革の開始に到る。 ブントシュー、アルメン・コンラッド等の一揆を経て宗教改の下にニイクラスハウゼンのファイファーの一揆に始まり、(a) 階級闘争の上昇期(一四七六—一五一七)フス 派 の影響
- によるロマ教会への抗議開始から農民戦争の敗北に到る。 (b) 初期市民 革命の 頂点(一五一七—一五二五、六)ルター
- 五年のミュンスターにおける再洗礼派の籠城事件に到る。(スイス)やガイスマイヤー(ティロル)の没落を経て一五三(c) 階級闘争の下降期(一五二六―一五三五)ツヴィングリ

が確定する。社会革命の敗北後の最も重要な抗争は、諸侯と王の間三、一五三五年―一五五五年の間に諸侯の宗教改革の最終的勝利

九一(四一一

ない。 において行われたが、諸侯相互の敵対性はここにおいても正揚され

五、これらの二つの中心地は多くの努力にも拘らず結合せずに終せン地方以外に初期市民革命の第二の中心地としてアルプス地方はかりか、ルター、ミュンツァーの活躍したテューリンゲン・ザクマス・ミュンツァーの人間像及び再洗礼派の役割を不明としてきたって、ルターについての伝説の長期にわたる圧倒的な支配は、トーの、ルターについての伝説の長期にわたる圧倒的な支配は、トース・

的生産様式である。この下において初期資本制的搾取が行われ、こ でいた。生産への資本の侵入により資本主義的生産様式が、産業資 くの平民の層が発生するのである。 れにより「プロレタリアートの先駆」 Vorproletariat といわれる多 本としてすでに鉱山業、 び中部ドイツにおいてすでに剰余価値の占取による資本形成が進ん そして依然として支配的であった商業・高利貸資本の他に、西南及 四世紀から開始され、一五世紀の半ば以来著しくなったのである。 られる。 封建的生産様式の没落と資本主義的要素及び形式の導入はすでに一 りひきおこされ、遠隔地商業の拡大によって倍加されたのである。 いわゆる問屋制度 Verlagsystem は不完全な、未発達の初期資本制 六、当時のドイツの経済状態は工業生産の著しい上昇に特徴づけ この発展は多くの技術の発明、特に新しい鉱物の発見によ 鎔鉱業、 繊維産業において成立していた。

七、産業資本に対して農業及びツンフト的手工業生産はますます

の強化を結果した。 停滞しつつあった。商品、貨幣関係の侵入は、農民への封建的搾取

て生産者の生産手段の分離も僅かしか進行していない。 従っ八、ドイツでは本源的蓄積はまだ僅かしか行われていない。 従っ

て完全に無力化しつつあった。領邦権力に結果し、中央権力は「大ハンザ」の増大する権力に対し化させる方向に働き合っていた。但し地方的分裂は多くの聖、俗の九、初期市民革命前夜のドイツの経済的・政治的状態は矛盾を激

- 搾取の対象となっていた。的、道徳的没落と反比例して増大する財政的要求になやむ法王庁の的、道徳的没落と反比例して増大する財政的要求になやむ法王庁の一〇、政治的に分裂し、無力であったドイツは、教会制度の精神
- 立するのではなくして、それと協力したのである。
 世が初期市民革命の中心舞台となったのである。しかし当時の生産帯が初期市民革命の中心舞台となったのである。しかし当時の生産帯が初期市民革命の中心舞台となったのである。しかし当時の生産帯が初期市民革命の中心舞台となったのである。しかし当時の生産帯が初期市民革命の中心舞台となったのである。しかし当時の生産帯が視りている鉄山業、鎔鉱業、繊維産業等の発展している先進地を対しているが関係の大きに、

の強い志向があらわれるが、これは種々の階級及び集団によって担求する強力な国民意識が発生する。これと関連して中央集権権力へする闘いにおいて、これらの状態の廃絶を求め、ドイツの統一を要一二、封建的分裂、ロマ教会による搾取、中央権力の没落に反対

するものである。われているにせよ、最も非国民的な諸侯という勢力に一致して反対

復を要求した。 等関係の回復、すなわち財産の平等性に到る市民的平等の実際的回的、平民的異端は共同体及び市民社会における原始キリスト教的平都市の市民的異端は教会の経済的、政治的地位に反対したが、農民都一三、異端の運動 Ketzerbewegung は初期市民革命を準備した。一三、異端の運動 Ketzerbewegung は初期市民革命を準備した。

一四、イデオロギーの分野ではルネッサンス期の人文主義が前準 一四、イデオロギーの分野ではルネッサンス期の人文主義が前準 一四、イデオロギーの分野ではルネッサンス期の人文主義が前準

の側に立ったのも決して偶然のことではない。コーラー等の巨匠をうみだした。偉大なドイツの芸術家が国民大衆一五、同時代のドイツの芸術の発展は、グリューネヴァルトやデ

ロマ帝国ドイツをおそったのである。不可能である。」(レーニン) このような危機が一六世紀初頭の神聖一一六、「革命は全国家的危機(搾取者も被搾取者も含む) なしには

ブルグ家の王制が存在していたが、それは決して国民的王朝ではな一七、帝国の最上層部には名目的にはロマの、実質的にはハプス

ある。

本自立化への志向は領邦教会の出現ともなった。 に対する、また自己の領邦等族つまり貴族、都市、教会に対する関いにおいて勝利をおさめた。一五世紀以来の都市と農村の階級闘争いにおいて勝利をおさめた。一五世紀以来の都市と農村の階級闘争に対する、また自己の領邦等族つまり貴族、都市、教会に対する闘を自立化への志向は領邦教会の出現ともなった。

のである。体に属し、これにより治められている領邦の存在により複雑となる体に属し、これにより治められている領邦の存在により複雑となる一九、かかるドイツの政治的状態は多くの教会国家つまり教会団

ここ、頁形書に制つに昇は、こめたりに対しました。して、や以前のような仕方ではその支配を主張することはできなかった。二〇、カトリックー保守的な立場の人々は、ドイツにおいてもは

は独立していた諸都市の自立性の喪失を伴ったのである。二一、領邦君主制の上昇はまた必然的に騎士制度の没落と以前に

東独における宗教改革と農民戦争の研究の現状

が国内市場むけの生産より優位に立っていた。した。宮廷用の生産(奢侈品生産、軍隊制度、城砦建設、その他建築等)の未発達は、広範な、自覚した市民的、資本家的階級の形成を阻止

王庁への闘いに団結したのである。てドイツの歴史上始めて凡ゆる階級が中産的市民層の指導の下に法九十五ヵ条の宣言によって開始された国民運動であり、そこにおい二三、初期市民革命の最初の段階は、ルターの免罪符に反対する

び完成にも力を尽した。なしとげ、統一的な標準ドイツ語の文書及び文学の言語の普及およなしとげ、統一的な標準ドイツ語の文書及び文学の言語の普及およトや弁駁書の著者としても、讃美歌の作詞者としても偉大な貢献をたのであるが、彼は聖書の翻訳者としてばかりでなく、パンフレッニ四、ヴァルトブルグ城においてルターは新約聖書の翻訳を行っ

の制度をも廃止した。 「五、ルターの宗教改革は市民階級から要望された「安い」wohl-に復帰せしめた。それはまた聖人崇拝の制度や教会の罰則その他 活に復帰せしめた。それは法王庁との関係を絶ち、教会関係の小 に記し、のは、との僧侶達を市民生

る。 たのであり、これと共に統一的国民的な反ロマの運動は終るのであされる。すなわちそこでは四つの宗教的、政治的 立場が 形成され二六、ヴォルムスの国会終了後初期市民革命の第二の段階が開始

に利益を感ずるすべての分子を含む。帝国権力や教会関係の(a) 保守的、カトリックの立場 これは既存の諸関係の維持

の都市貴族がこれに入る。諸侯、高僧から世俗の諸侯の一部や富裕な貴族、そして一部

- 市民層、世俗諸侯のかなりの部分も含んでいた。特に中部、北部ドイツのそれを含み、さらに下級貴族の大半、(b) 市民的、穏和なルターの立場 これは反対派の富裕な層
- (d) 農民と平民の革命的運動 これは全ドイツをおおい、ミキがて市民的穏和派とは根本的に異なっていたのである。主義的志向とを融合させてはいたが、共和的、実践的態度にリヒやベルンの富裕市民を含み、ルターの市民的要求と人文(c) 市民的、急進派 これはツヴィングリの指導の下にツュ
- を知っていた諸侯達の階級同盟によって始めて可能であった。 対派が敗退していったのは、彼らの敵対者の不統一を利用することのでなく、内部矛盾や対立を含んでいた。市民的急進派や革命的反のでなく、内部矛盾や対立を含んでいた。市民的急進派や革命的反こと、これらすべての党派において、分裂そのものより、その党ニセ、これらすべての党派において、分裂そのものより、その党ニセ、ションファーとガイスマイヤーにその要求は代弁されている。

争から独立して行われたことにまずあらわれた。でに示されていたが、さらにそれは騎士層の叛乱が国民大衆との闘ニ八、統一的、革命的戦線の崩壊はヴィッテンベルグの運動にす

的計画は領邦体制の絶滅と国民への権力の移行の二点であり、国民宗教改革 Voksreformation の必然的表現を創りだした。彼の政治の教説をツヴィカウ、プラハ等で発展させ、ドイツにおける国民的二九、トーマス・ミュンツァーは早くからルターと分離し、独自

だけでなく、ドイツ史の国民的政策の頂点を示していた。的宗教改革の完成であった。しかもこの変革は農民的平民的な立場

過激派はミコンツアーとガイスマイヤーの影響の下にあった。二ヵ条の綱領とヴァイガントのハイルブロンの改革案に代表され、三〇、大農民戦争の過程で二つの分派が形成された。穏和派は

という檄が位置している。このの左右両翼の中間にフランケン農民の「農民結集大会のため」

足はこの弱点を倍加した。 三一、農民戦争に象徴されるドイツ初期市民革命は下から統一的 国民国家をつくろうとする国民大衆の最初の試みを示した。しかし 国民国家をつくろうとする国民大衆の最初の試みを示した。しかし 国民国家をつくろうとする国民大衆の最初の試みを示した。しかし 国民国家をつくろうとする国民大衆の最初の試みを示した。しかし 国民国家をつくろうとする国民大衆の最初の試みを示した。しかし 国民国家をつくろうとする国民大衆の最初の試みを示した。しかし 国民国家をつくろうとする国民大衆の最初の試みを示した。しかし 国民国家をつくろうとする国民大衆の最初の試みを示した。しかし 国民国家をのとないるが、のである。農民自身の政治的訓練の不 とはこの弱点を倍加した。

これは当時の封建体制の危機を救うための唯一の道であった。三二、初期市民革命の敗北は、領邦君主制の勝利をもたらしたが

となり終った。
こ三、農民戦争の敗北にさいしルターはむごい役割を演じた。彼三三、農民戦争の敗北にさいしルターは砂ィッテンベルグの農民の蜂起に直面 する と 農民の弾圧を主張はヴィッテンベルグの農民の蜂起に直面 する と 農民の弾圧を主張

三四、ミュンツァーの教説は行動に起ち上った革命的農民と平民

東独における宗教改革と農民戦争の研究の現状

民的発展の正しい方向を指示していた。 というであるが、その後十年余りも信奉者達は彼らの理想が、の発展の正しい方向を指示していた。 としてドイツの国の実現に努力した。 過激派のもう一人の指導者であるガイスマイヤの実現に努力した。 過激派のもう一人の指導者であるガイスマイヤーはミュンツァーより市民的であった。 そして時代を超越したミューはミュンツァーより市民的であるが、 との後十年余りも信奉者達は彼らの理想に影響を与えた。彼の処刑によって初期市民革命はその卓越した指

であり、ブルジョア革命の時期の第一歩 として 評価しうるのであ 建闘争はこの弱点を克服し国民国家を建設して行く方向を示したの た。宗教改革と農民戦争、特に後者における農民を中心とする反封 家=絶対主義体制の成立が欠けていることに致命的弱点を示してい それを阻止する条件、 ドイツは一方で市民革命の前提条件をそなえつつあったが、他方で この成熟の第一歩は農民の反封建闘争に示される。一六世紀初頭の に「初期市民革命」と名づけるのである。すなわち一六・七世紀は 農民戦争とイギリス、フランスの古典的市民革命を区別し前者を特 とらえるソ連の歴史学者に基本的に賛成しつつも、なお宗教改革と ての説明を行っている。 補足的な説明を行っている。その説明において彼は最新の西ドイツ(注5) 加えると共に、彼の「初期市民革命」という独自の概念規定につい におけるこの時期の研究を取り上げ、その観念的歴史分析に批判を ロッパ中で市民革命の前提及びその諸力の成熟の時期であり、 特に封建制廃止の政治的条件たる中央集権国 彼は宗教改革と農民戦争を市民革命として

(四 五 五

市民革命の性格をもつところの「初期市民革命」なのである。れは単なるブルジョア革命の先駆的形態としてではなく、それ自身れたわけではなく、この意味で古典的市民革命と区別されるが、そる。したがって市民革命の条件が完全に成熟し、市民革命が完成さ

B 発題をめぐる討論

言をしているにすぎない。 さてこのようなスタインメッツの問題提起をめぐってどのような ものは、僅かにエックハルト・ミューラー・メルテンスとイングリット・ミッテンツヴァイの二人であり、この会議においては論争らる。スタインメッツの提出した基本問題を中心に行われるべきであるのに、 ものは、僅かにエックハルト・ミューラー・メルテンスとイングリー・シー・シー・シーンの「初期市民革命論」に真向うから取り組んだるのは、僅かにエックハルト・ミューラー・メルテンスとイングリー・シー・シー・シー・ストーンのであるのに、 さてこのようなスタインメッツの問題提起をめぐってどのような さてこのようなスタインメッツの問題提起をめぐってどのような

らわれている。一体一六世紀のドイソは一七世紀のイギリスのようられているため、古典的市民革命との区別が明らかにならぬことにあるが、同時にスタインメッツの規定は不十分さを伴っている。そしるが、同時にスタインメッツの規定は不十分さを伴っている。そしるが、同時にスタインメッツの規定は不十分さを伴っている。そしるが、同時にスタインメッツの規定は不十分さを伴っている。そしての不十分さは彼が初期市民革命なる新しい性格規定をうちだしたことは意義があるが、同時にスタインメッツの規定は不力による統一国民国家の形成をめける議論を発展させて封建制の破壊による統一国民国家の形成をめて、ミューラー・メルテンスによればスタインメッツがソ連にお

部分となっているが、まだ全一支配を獲得することが出来ず上昇す をえなかった。第二段階はブルジョアジーがすでに支配階級の重要 った。これは当然宗教的外装の革命、 パ封建制の精神的支柱であったロマ教会の支配を打破することにあ 市民革命の発展段階は次のようになる。第一段階の課題はヨー 革命の発展段階としてとらえていたのである。エンゲルスによれば ジョアジーの封建制への決戦として、すぐれてヨーロッパ的な市民 での市民革命の第一段階の勝利として位置づけることを意味するの である。すなわちマルクスやエンゲルスはかの三大決戦を個々の国 のに封建制廃止の課題をおわせるものではなく、封建的国家の枠内 大決戦の第一段階と考える彼の主張は、決してこの第一段階そのも Ł ではなかったのである。エンゲルス自身の規定もよく検討してみる の市民革命としてとらえたというよりは、むしろヨーロッパのブル 戦争の直面した課題は決して封建制の完全な廃止および権力の移行 その利害関係は封建体制と一致していたのであり、宗教改革と農民 的条件があったのであろうか。たしかに一四、 なものに留っていた。すなわち彼ら自身封建的土地所有者であり、 なりうる主体的、 かし一六世紀当時のドイツの市民階級はまだ市民革命の推進主体と て資本制的生産様式が生成すると共に、 済的発展が著しく鉱山業、鎔鉱業、金属加工業、繊維産業等におい 宗教改革とドイツ農民戦争をヨーロッパ・ブルジョアジーの三 ブルジョアジーへの政治権力の移行を可能とする経済的、 客体的条件をもたず、階級としては極めて未成熟 宗教改革としてあらわれざる 地域的分業も前進した。し 五世紀のドイツは経

る。

高的な解明の統一によるとする。 ところで中央集権国家体制は封建支配の最後の段階でありなが ところで中央集権国家体制は封建支配の最後の段階でありなが ところで中央集権国家体制は封建支配の最後の段階でありなが ところで中央集権国家体制は封建支配の最後の段階でありなが ところで中央集権国家体制は封建支配の最後の段階でありなが ところで中央集権国家体制は封建支配の最後の段階でありなが ところで中央集権国家体制は封建支配の最後の段階でありなが ところで中央集権国家体制は対理支配の最後の段階でありなが ところで中央集権国家体制は対理支配の最後の段階でありなが ところで中央集権国家体制は対理支配の最後の段階でありなが ところで中央集権国家体制は対理支配の最後の段階でありなが

ことが不可能であったことを示していると指摘しているだけであ同盟においてとらえようとしていることに対し、現実はそのような体にないの問題提起同様にこの会議においては余りかえりみられずに終り、このミューラー・メルテンスの注目すべき発言はスタインメッツ

インメッツの初期市民革命論を是認した上での議論である。命の開始をみるシュトラウベの二人の発言があるが、いずれもスタを扱ったフォグラーと、「ズイグムンディの改革案」 に初期市民革ニ、この他政治史の分野では「ハイルブロン帝国改革案」の意義

に基いた地方間の交換についてザクセン地方を中心としてその実態 需要がある。さてブラシュケはこのような需給関係のアンバランス る。そして第三に遠隔地商業によってのみ充たされうる奢侈品への あり、 進展と共に実現していったのであるが、特に次の三つの需給関係の 品への需要のある地域であって、このうち特に原料への需要は大で アンバランスが注目される。第一に消費及び生産のための大量の商 当時のドイツはすでに都市と農村の間の局地的交換から地方間の商 な形での中世的な狭い経済領域の自足性の打破は特に地方的分業の 品交換への発展が行われていたと考えるのである。そしてこのよう 政治的分裂が直ちに経済的分裂を意味するという通説に対して彼は 段階にあったかについて問題提起を試みているのである。すなわち シュケの「ドイツの経済的統一性か経済的地方性か?」である。彼発言は経済史の分野で行われている。一つはカールハインツ・ブラ は一六世紀当時のザクセン地方において商品経済がどのような発展 三、市民革命論と関係してかなり重要な内容をもつと考えられる 第二に農業及び工業生産物の剰余のある地方の発生があげられ このための遠隔地商業は当時の工業生産の前提となって 金属産業においては地方間の分業、

東独における宗教改革と農民戦争の研究の現状

裂、これに基く関税や禁制の存在が重要な意味をもっていた。ここ な矛盾が一六世紀当時のドイツには存在していたのである。 に経済的な発展と政治的にはそれを阻止する分裂という極めて特殊 止する要因も強固に存在していたのであって、特に政治的領邦の分 の発展をも促がすのであるが、他方ではこのような経済的結合を阻 みられることを指摘する。そしてこれは交通網の整理及び信用機構

展から新しい生産関係の生成を積極的に主張するクンツェの見解を族及びツンフト的小市民)の補強を目的とした。そして農村工業の進 の農村進出とこれに対応した漂白迄行う農村織元の広範な生成及び ケムニッツの漂白業を中心として批判し、一方における商業資本 の導入は農村における経済的発展を阻止したのである。第三にこの げられなくてはならない。第二に農民戦争の敗北による再版農奴制 る。第一に農業生産の分裂・分散と商業資本そのものの弱体性があ のその後の進展は以下にあげる諸事情の下で阻止されることとな 商業資本の生産への積極的介入の結果でもあった。同時に農村工業 産業における特殊な都市と農村の対立としてあらわれ、農村工業は フト的手工業に対し農村工業の発展に求められる。特にこれは繊維 ハイツはこれを地域内における社会的分業の展開の変化としてとら(社3) ことの当然の結果として領邦国家の政策は明白に封建的諸勢力(貴 わちハイツによれば一四・五世紀の地域内分業の特徴は都市のツン えようとしており、ブラシュケの立論を補う形となっている。すな 四、さてブラシュケの発言が主に地方間の分業及び商業という角

> についての研究を推進することを提唱している。 Refeudalisierung の事実にもっと注目する必要を説いている。そし 仲買人的企業家の発生等の現象を認めると 共に、産業の 再封建化 てこのような観点から鉱山業、金属加工業、ガラス工業等の諸産業

野においてはカー 五、さてこの二人の経済史に関する注目すべき発言の他にこの分

するエリッヒ・ノイス、史料刊行についてのヘンリク・ベッカー 導者であるトーマス・ミュンツアーとミカエル・ガイスマイヤーの への処罰についてのゲプハルト・ファルク、中部ドイツの警察に関 いる。第四に、若干の個別分析がある。これには農民戦争後の農民(社20) ー・ミュルフォルトの三人である。第三には農民戦争の卓越した指もので、ゲルハルト・チェビッツ、ハンナ・ケディッツ、ギュンタ 前面にあらわれてくる再洗礼派の運動を思想的・社会史的に扱った 関する様々な分析である。その第一のグループは農民戦争当時の中 二人に関するもので、前者についてはヘルマン・ゲープケとゲルハ 部ドイツ及びバルト海地方の都市における運動及び諸要求を扱った エリッヒ・ドンネルトの三人があげられる。第二には農民戦争後にものであり、ゲルハルト・ギュンター、ヘルムート・ミューラー、 ものであり、ゲルハルト・ギュンター、 ・プレンドラー、後者についてはヨセフ・マケックが発言して この他に収録されている発言は主に農民戦争の前後の運動に

発言が含まれている。 (注21) フィリップ・メランヒトンについてのヴァルター ・ツェルナー等の

このため

ツは冒頭の問題提起の中で、 程の正確な分析、とくに反封建闘争の中心点の確定、(五)ドイツ に、史料に対する徹底的研究、非マルクス主義的歴史学への批判の の諸課題を明らかにした。このような方向についてはスタインメッ 勢力についての個別研究の前進による反封建闘争の主体的エネルギ 本源的蓄積とくに資本主義発生の形態に関する究明、 宗教改革と農民戦争の性格規定を明らかにすること、 ては、 (一) ソ連歴史学会との協働のうちに歴史理論の究明、 特に 目すべき論評とはなっていない。その上で彼は今後の方向につい これは彼自身認めている討論全体の偶然的・恣意的性格の故に、注 場から個々の報告、発言に対する簡単な論評を試みている。しかしそこの会議の目標であったとし、彼自身の「初期市民革命論」の立 人文主義についての研究、(六)再洗礼派の 運動についての研究、 こでまず東独歴史学界の停滞を指摘し、これを克服して行くととこ 者スタインメッツの総括をもって終っている。スタインメッツはそ 会の会議における「ドイツ初期市民革命」についての討論は、発題 の正確な評価、 七、さて以上簡単に紹介した東独のドイツ歴史家協会の中世史部 理論的究明によって始めて可能となるとしている。 (四)時期的にも、 計画的、体系的な研究体制の確立と共 地域的にも 初期市民革命の過 (三) 反封建 (二) 資本の

二段階の立体構造が重要であり、 のであるが、同時にその理論的考察における一般規定と特殊規定の 実を素材としてたえず豊富化されて始めてその有効性が保証される 続きが必要となる。勿論このような理論考察は、あくまで歴史的現 の特殊類型をつくりだし、その上で個別的事象を分析するという手 の一般規定を市民革命の諸類型と関連づけることにより、 さらにこの一般規定に個別的事象を直接あてはめるのではなく、こ 類型から極く抽象的な市民革命の一般規定を理念像として創造し、 えなくてはならない。そしてこのためには、まず様々な市民革命の 個別的事象そのもののもつ一般性と個別性のいずれをも正しくとら をとりあげて、これを市民革命との関係において考察する場合、その しては第一に市民革命論があげられよう。 して行われない結果となったのである。このような意味での問題と 支配しているようにみえる。そして若干のすぐれた問題提起を行っ め相互の問題提起の真剣なかみ合いによる、 一面においてすぐれた問題提起も夫々に弱点を有しており、このた た人々も、このような一般的傾向から完全に自由であるとはいえず を有効にするような歴史理論の創造に対しても無関心と教条主義が 歴史分析そのものも極めて無味乾燥なものとなると共に、歴史分析 易にみてとれるようにその水準は決して高いとはいえない。若干 人々を除いては理論と歴史分析は分離してしまっており、 一端にふれることが出来たのであるが、これ迄の紹介においても容 さて我々はこの会議の討論を通じ、最近の東独歴史学界の現状の 従来との区別が明確でないために 我々が個別的な歴史事象 生産的な論争が一つと

東独における宗教改革と農民戦争の研究の現状

市民革命

けではないから、その主張は何故ドイツにおいては他の国と異り第 把握を試みているのは、この意味で注目すべき立論を含んでいる。 テンスがエンゲルスによりつつ市民革命の進行過程の三段階という る。これは段階規定の立体的把握であって、例えばミュラー・メル われているかという問題の究明によって始めて解決されるのであ の究明を含む)、その上でドイツにおいてはどのような個別性があら 特殊的規定を明確とし(プロシャ型とアメリカ型のいわゆる二つの道 しかし彼においても以上のような立体的把握が十分なされているわ ら資本制社会への移行という歴史的過程についての一般的規定(ヨ 明確にするであろう。すなわち市民革命の類型化の課題は封建制か 究明は古典的市民革命をなしとげえたイギリス、フランスとそれを 一段階が社会的激突としてあらわれざるをえなかったかというドイ なしとげえずしてなしくずしに近代化していったドイツとの相違を 市民革命の特殊類型を明らかとすることである。そしてこの問題の 要なことは第一に市民革命の一般規定に基き、ヨーロッパにおける 古典的革命との対比においてとらえられているが、何よりも先ず必 論に即していうならば、スタインメッツの提出した初期市民革命論 **理論の有効性が十分発揮されなかった嫌いがある。そして市民革命** の個別性が明確とならないのである。 ロッパを主な素材としつつそれを抽象した)に基き、 かが問題となるのである。すなわち彼においては初期市民革命は 果して以上のような方法的厳密さに基いて構成されているかど ヨーロッパの

さて以上の二重の一般的・特殊的規定の上で宗教改革と農民戦争

摂取される必要があるのである。 主体的立場の推進と共に、西独の実証史学の成果ももっと積極的に ってもっと深化され、科学的内容を獲得することとなろう。そして る必要がある。ブラシュケやハイツ等の注目すべき主張もそれによ も立体的な理論的考察とそれに基く史料分析がもっと厳密に行わ 構造論・流通過程及び生産過程における商業資本の役割等について と同時に先に紹介した経済史の分野においても社会的分業及び市場 挫折したとしても)市民革命が展開されたとみるべきであろう。この刊月青命としてはあられれず、一八四八年になって始めて(たとい 革と結合し、極めて独自の社会的激動と化し、特に宗教改革はイギ 題であり、 ように初期市民革命論は根本的検討を必要とするのであるが、これ 市民革命としてはあらわれず、 リスにおける市民革命の前提条件となったのであるが、それ自身は るをえなかった農民戦争が、国際的条件と相まって下からの宗教政 命の条件を完全に整えていたとはいえないのである。勿論、封建ド う。 何故ならば 市民革命はまず 政治革命であり、 の正確な位置づけを行うならば、それは市民革命前夜の反封建闘争 イツ社会の種々の個別的条件のために他国と比べ二世紀近く遅れざ の推進であるが、宗教改革と農民戦争はこの点においてまだ市民革 ルジョア的な) 権力の任務はブルジョア的発展の促進=本源的蓄積 としてヨーロッパ全体にもドイツ自身にも大きな意味をもったにも それ自身を市民革命として規定をする こと は 無理であろ 第二に封建権力を打倒したブルジョア(本質においてブ 権力の移行が課

ŧ

- M. M. Smirin, Die Volksreformation des Thomas Münzer und der große Bauernkrieg, 1952.
- Beitrage 6 (1957). Bauernkrieges in Deutschland. In: "Sowjetwissenschaft", Vergleich, Frage nach dem Entwicklungsstand der Wirtschaft, nach dem Charakter schaft", Vergleich, Beiträge, 3 (1958) S. 363 ff. J. M. Grigorjan, Zur eg in Deutschland als erste bürgerliche Revolution. In: "Sowjetwissen-等の諸著作を発表している。A. D. Epstein,Reformation und Bawernkri wissenschaft "Gesellschaftswissenschaftl. Beitrage 2 (1958)S. 243 ff. Bewegung in Deutschland im Zeitslter der Reformation. In : "Sowjet-Reformation, 1955. & Wirtschaftlicher Aufschwung und revolutionäre カヤ等が参加している。スミリンは前掲書の他に Deutschland vor der Tschaikowskaja, Über den Charakter der Reformation und des Reformation und des この論争には宗教改革と農民戦争を市民革命としてとらえるスミ エプシュタイン、 グリコリアン等とこれに反対のチャイコウス Bauernkrieges in Deutschland, 1958. O.
- (の) Deutsche Historiker-Gesellschaft, Tagung der Sektion Mediävistik der deutschen Historiker-Gesellschaft vom 21-23. 1. 1960. in Wenigerode, Bd. 1. Städtische Volksbewegungen im 14 Jahrhundert, Bd. 2. Die frühbürgerliche Revolution in Deutschland. 五片 Bd. 2. 弘 F. R. D. 心監小。
- senschaft, Heft 1. VIII Jahrgang, 1960. SS. 113-124. に発表されて

- \mathcal{L}° M. Steinmetz, Die frühbürgerliche Revolution in Deutschland (1476-1535). Thesen.
- (45) M. Steinmetz, Problem der frühbürgerlichen Revolution in Deut schland in der ersten Halfte des 16. Jahrhunderts, in F. R. D. SS. 17-52.
- (9) M. Steinmetz, Nachwort, in F. R. D. S. 296.
- (~) E. Müller-Mertens, Zu den Aufgaben der frühbürgerlichen Revolution in Deutschland und der Rolle des Königtums, in F.R.D.SS. 81-90
- (∞) I. Mittenzwei, Bemerkungen zum Charakter vom Reformation und Bauernkrieg in Deutschland, in F. R. D. SS. 101-107.
- (5) F. Engels, Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft, Einleitung zur englischen Ausgabe, 1892.
- (A) G. Vogler, Zur Entstehung und Bedeutung des Heilbrouner Programms, in F. R. D. SS. 116-125.
- (\(\mathrice{\pi}\)) M. Straube, Die Reformation Sigismundi als Ausdruck der revolutionären Bewegungen im 15. Jahrhundert, in F. R. D. SS. 108-115.
 (\(\mathrice{\pi}\)) K. Blaschke, Deutsche Wirtschaftseinheit oder Wirtschaftsparti.
- (A) K. Blaschke, Deutsche Wirtschaftseinheit oder Wirtschaftspartikularismus?, in F. R. D. SS. 53-58.
 (A) G. Heitz, Zu einigen wirtschaftsgeschichtlichen Fragen der früh.
- (四) G. Heitz, Zu einigen wirtschaftsgeschichtlichen Fragen der früh bürgerlichen Revolution, in F. R. D. SS. 59-63.
- (当) A. Kunze, Der Frühkapitalismus in Chemnitz, 1958.
- 5) K. Steinmüller, Zur Lage der Zwickauer Tuchmacherei zwischen 1470. und 1530, in F. R. D. SS. 220-224.
- (乌) J. Schildhauer, Das Anwachsen der plebejischen Schicht der Sta

Revolution, in F. R. D. SS. 73-80. dtbevölkerung im Ostseegebiet und deren Rolle in der frühbürgerlichen

- Reichsstadt Mühlhausen Th. zur Zeit des Bauernkrieges, in F. R. D. D. Loesche, Zur Lage der Bauern im Gebiet der ehemaligen freier
- (A) G. Günther, Der mühlhäuser Rezeß vom. 3. Juli 1523, in F. R. D. R. D. SS. SS. 167-183; H. Müller, Die Forderungen der thüringischen Städte im Frage der Reformation und der Volksbewegungen in Livland, in F. Bauernkrieg, in F. R. D. SS. 138-144; E. Donnert, Bemerkungen zu 145-151.
- Taüfer in östlichen Länder, in F. R. D. SS. 234-294. bogen der deutschen frühbürgerlichen Thuringen, in F. R. D. SS. 184-207; G. Zschäbitz, Die Stellung der Täuferbewegungen im Spannungs Zur Ideologie der Täuferbewegung im Mühlhausen Revolution, in F. R. D.SS. 152-G. Mühlpfordt, Deutsche
- tlich gesehen-in F. R. D. SS. 91-100. G. Brendler, Eine Exkursion zu H. Goebke, Thomas Müntzer-familiengeschichtlich und zeitgeschich-Wirkungsstätten Thomas Muntzers in Thuringen, in F. R. D.

- Michael Gaismaier, in F. R. D. SS. 208-219. SS. 228-233; J. Mace'k Resumé des noch unueröffentlichten Buches über
- (ন) G. Falk, Strafgeldregister, unausgeschöpfte Ouellen zur Geschicht Zollner, Philipp Melanchton und der Bauernkrieg, in F. R. D. SS. 225 des Reformationsjahrhunderts, in F. R. D. SS. 134-137; H. Becker, Neuß. Über städtische Polizeipersonale in Mitteldeutschland während Ausgaben frührevolutionärer Ouellen, in F. R. D. SS. 163-183; W. des Bauernkrieges 1525 in Thüringen, in F. R. D. SS. 126-133; E.
- 22 彼によれば本稿であつかった第二テーマより第一テーマの方が成果が 1960, Heft 4, SS. 964-974. に Adolf Laube によってなされている。 あったそうである。 についてのごく簡単な報告は Zeitschrift für Geschichts-wissenschaft, M. Steinmetz, Nachwort, in F. R. D. SS. 295-306; なおこの学会
- 23 年報四号所収参照。 これについては拙稿「歴史科学方法論」慶応義塾経済学会経済学
- (24) 拙稿「ドイツ農民戦争の歴史的意義」三田学会誌五十巻三号、六 十二号、五十一巻六号所収参照

O D · Ø ンカン他著

『統計地理学』

Statistical Geography, Problems in Analyzing Areal Data, 1961. (The Free Press of Glencoe, Illinois, pp.191) Otis Dudley Duncan, Ray P. Cuzzort and Severley Duncan:

橋潤二郎

さし、 じてある程度共通する問題が生じてくることが予想される。最近各 ることからいって、目的意識はともかくも方法論的には各分野を通 あっても、人間活動のエーリアルな側面の追求という共通課題があ ってよかろう。だが、こうした考察は、一方において、それが一定 的ないし地理的秩序に関する考察として、脚光をあびつつあるとい てきた地表上の人間活動は、最近では、より広範な人間活動の空間 エーリア内の人間活動を対象とすることからいって、必然的に「エ として専ら自然と人間の相互作用という説明原理をもって考察され 治学においてもみられるものである。従来、地理学固有の研究対象 してきたが、この動向は単に経済学に限らず他の分野、社会学、政 に対する関心が増大しつつあることは、既に、機会あるごとに指摘 ーリア」なる概念に対するインダーディシプリ 最近、地域経済の問題とからんで、経済活動のエーリアルな側面 たとえそれが各分野固有の研究対象を考察する場合で ナリな関心をよびお

問題をかかえていることが指摘され得るのである。 に独立に専攻されているが、これらがいくつかの共通な方法論上の 度、又、人口比重、更に、一部の都市社会学の研究に用いられてい まつわって生する諸問題の解決は現在各分野の研究者によって相互 る segregation index にしても、ほぼ同一であるといってよい。 ている測定方法は、フーバーの立地係数、フロー の度合が測定されなければならないわけであるが、ここで採用され その部分をなすサブ・ポピュレーションのエーリアルな集中・集積 って、これらいずれの分野でもトータル・ポピュレーションの中に にみられる観察単位のエーリアルな分布ないし結合関係の測定であ の最も端的な事例は、最近の立地論、人口論、都市社会学等の文献 究者によって非常に長期にわたり論議され、しかし、依然として結 べくいかなる技術が採用さるべきか、ということである。又、後者 論のでない、地域の限界決定の指標は何か、又、その指標に見合う 生み、夫々大なる成果をあげている。これら各分野の地域概念は夫 近では政治学においてさえ権力の地域的分割の問題が活発な論議を るコミュニティの研究、経済学における空間経済の研究、更に、最 を示したのは地理学の研究者であったと思われるが、社会学におけ 々相違しているが、共通にみられる一つの基本的問題は、地理学研 来「地域」概念を最もリファインし現実把握の上でも積極的な貢献 要するに、これら種々の現象のエーリアルな側面の究明、地域に 重視は前者の一つのあらわれといってよかろう。いうまでもなく従 分野にみられる実態調査の対象ないし研究の場としての「地域」の レンスの地域集中